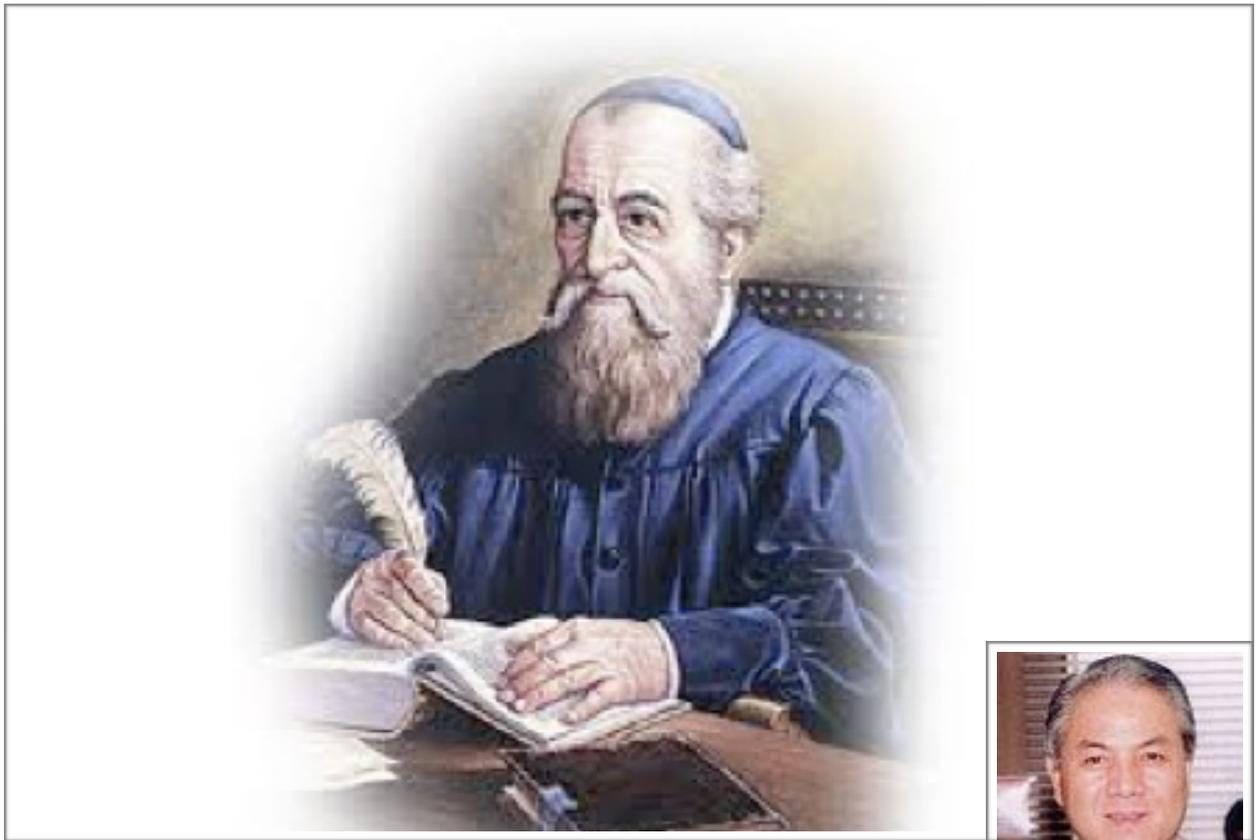


# メノナイトの流れ

## メノナイト教会の成立と 日本への宣教



有田 優 著

第2版

# 目次

はじめに .....	3
『メノナイトの流れ』 .....	5
1. 主のことばへの聴従 .....	5
信仰の源流 .....	5
スイス・ブレザレン .....	6
教養と実践 .....	7
2. キリストのみを土台として .....	8
迫害と離散 .....	8
メノー・シモンズ .....	8
3. 愛と和解の福音を携えて .....	11
信仰の自由を求めて .....	11
北米のメノナイト .....	11
日本への宣教 .....	12
有 田 優 牧師 略歴 .....	15
発行者・発行所 .....	16

## はじめに

有山優牧師の『メノナイトの流れ』は、1979年（昭和54年）3月11日、18日、25日付の「クリスチャン新聞」に掲載され、同年の7月から9月号の、日本メノナイト・ブレザレン教団発行『よきおとずれ』第262～264号に掲載されたものです。

<表紙の写真：メノー・シモンズ>

# 『メノナイトの流れ』



有田 優 著

# 『メノナイトの流れ』

有田 優 著

日本メノナイト・ブレザレン教団 発行

『よきおとずれ』 第262～264号より

< 1979年 (S.54) 7月～9月 >

## 1. 主のことばへの聴従

### 信仰の源流

メノナイト系、および、平和的アナバプテスト（再洗礼派）諸派の信仰の源流を、十六世紀初めのツウィングリーの宗教改革に参加した、あの若き聖書学徒たち、いわゆるスイス・ブレザレン（スイス兄弟団）に求めることは、現在の教会史学会の定説となりつつある。かつては、彼らは、プロテスタントの正統主義をもって任ずる改革派や、ルター派の教会史家から、ドイツに出現した暴力的、狂信的再洗礼主義者たちの同類とみなされ、異端、また狂信の徒として、不当な取り扱いを受けたものであったが、近年になって、エール大学のベイントン博士、ハーバード大学のウィリアムズ教授など、また、日本の学者たちの中にも、正当な評価をする者の出てきたことは感謝である。

## スイス・ブレザレン

それでは、スイス・ブレザレンとは、どのような人たちであったろうか。ツウイングリーが、スイスのチューリッヒにおいて、宗教改革に乗り出したのは、1519年の1月のことであった。

ルターの書物によって刺激された彼は、＜聖書のみ＞を改革の旗印に、初代教会の復元をはかり、ローマ・カトリックの聖書的ならざる諸習慣を、次々と打破していった。すなわち、聖像・聖遺物の崇拜、レント期間中の断食、聖職者の独身制、ミサ聖祭などの廃止がそれである。

このツウイングリーのもとに集まって、一緒に聖書の原典研究に従事していた者の中に、後の平和的再洗礼派であるスイス・ブレザレン（彼らは、お互いに自分たちのことを、「兄弟」と呼んでいた）の指導者となった、コンラート・グレーベル（1498年頃-1526年）やフェリックス・マンツ（1480年頃-1527年）などがあつた。

グレーベルは、チューリッヒの旧家の子弟で、バーゼル、ウィーン、パリーなどに遊学し、人文主義的教養を身につけて、1520年の夏頃に帰郷し、熱心なツウイングリー主義者となった。

マンツも、チューリッヒの出身で、パリーに学び、人文主義的教養と古典語とを身につけて帰郷し、グレーベルなどとともにツウイングリーの聖書研究グループに加わり、ツウイングリーの熱心な信奉者となった。

ツウイングリーは、彼ら優秀な若者たちとともに宗教改革を押し進めて行ったのであるが、急激な改革によってもたらされる、人々の不安と動揺、また、反感などを考慮して、信仰上のことがら、たとえば、ミサ聖祭の撤廃についても、市参事会の手によだねて、現実と妥協し、さらに、最初、聖書にもとづいて主張していた幼児洗礼の廃止についても、その説を変更撤回するにいたつた。

そして、それだけでなく、彼とともに聖書研究に従事していたグ

レーベルやマンツを白眼視し、彼らが、あくまで宗教改革を徹底することを主張し、幼児洗礼の廃止を唱えたのに対して、集会禁止令を出し、彼らに追放令を発するまでになった。

ここに彼らは、自分たちだけで、聖書にもとづいた真の宗教改革をなし、初代教会の信仰に復帰しようと決意し、1525年1月21日の夜、同志一同、マンツの家に集まり、祈りのうちに神の導きと御旨とを求め、信仰告白にもとづく再洗礼を実施した。そして、翌1月22日の夕刻、グレーベルの司式により、黒パンと常用ぶどう酒による、主の記念としての聖餐式が執り行われ、ここに平和的アナバプテスト、スイス・ブレザレンの誕生を見た。しかし、そこに彼らを待っていたものは、過酷な迫害と離散と殉教の死とであった。

グレーベルは、1526年に病死。マンツは、1527年1月5日に、チューリッヒのリマト河口で、「主よ。わが霊を御手にゆだね」と叫びつつ、溺死刑に処せられた。

## 教養と実践

彼らの教養は、キリストと使徒たちのことば、特に山上の垂訓の文字どおりの実践で、主のみことばへのひたすらなる聴従であって、そのためには殉教をもいとわなかった。彼らの信仰は、1927年に起草された<シュライトハイム信仰告白>によって知ることができるが、要約すると次のとおりである。

- 1 信仰告白による洗礼（幼児洗礼の否定）
- 2 背信者の交わりからの除外（マタイ 18：15～17）
- 3 主の記念としての聖餐（象徴説）
- 4 世から聖別された生活
- 5 新約の基準にのっとりた牧師職の保持（テモテ 第一 3：7）
- 6 主のおしえにもとづく剣の放棄（絶対平和主義）
- 7 誓いの禁止（マタイ 5：33～37）

## 2. キリストのみを土台として

### 迫害と離散

＜聖書のみ＞を標榜し、主のみことばへの聴従ゆえに、新旧両教徒から憎まれ迫害されたスイス・ブレザレンの人々は、各地に散らされて行ったが、メノー・シモンズは、彼らに対する迫害のさまを次のように記している。

「ある者は絞首刑に処せられた。また、ある者は、非人道的な恣意によって拷問にかけられた後、処刑柱の絞索で扼殺された。ある者は火あぶりにされ、生きながらに焼かれた。ある者は剣によって殺され、投げ捨てられ、空の鳥がこれをついばんだ。ある者は魚の餌食とされた。他の者は困窮と苦難の中に家もなく、山や砂漠、地の穴や洞穴を、あてもなくさまよい歩いた。彼らは、妻や幼な子をともなって、国から国へ、町から町へと逃れまわった。彼らはすべての人に憎まれ、罵倒され、讒言（ざんげん）され、誹謗された。」

しかし、こうした激しい迫害と弾圧によって、彼らの信仰は壊滅にひんしたであろうか。否、むしろその逆であって、彼らの主にある聖徒にふさわしい殉教のさまは、多くの人々の心をとらえ、その信仰は、国境を越えてドイツ、オランダへと広がっていった。

### メノー・シモンズ

スイス・ブレザレンとは別に、新約聖書の研究をなし、彼らと同じ信仰を持つにいたり、後にオランダの平和的アナバプテストの指導者となった人物に、再洗礼派中興の祖とも言うべきメノー・シモンズ（1496～1561）がいる。

彼は、オランダ西フリースランドのウィットマルスムの生まれであるが、フランシスコ修道会で修道士としての訓練を受け、28歳でカトリック司祭となり、1531年以降、故郷で田舎司祭として平凡な日々を過ごしていたが、その地にも宗教改革の波は押し寄せてきた。

最初、彼はミサの化体説に疑問を抱いたことから、聖書をひもとき、やがて、福音的なアナバプテストの信仰に導かれるにいたったのであるが、たまたま、彼の教区民がミュンスターの暴動に巻き込まれたことから立ち上がり、講壇より福音的説教をすること九ヶ月、ついに1536年1月30日カトリック司祭職を辞し、一切を放棄して出奔した。

彼は、宗教改革史上、まれに見る〈司牧者的使命感〉を抱いた人物と評されているが、1536年末頃から、オランダ再洗礼派の長老となり、迫害のため四散していた信徒を訪ね歩き、神のゲマインデをつくって行った。その活動範囲は、西フリースランドからアムステルダムにまで及び、文字通り決死の伝道であった。その後、彼は迫害のために、東フリースランドへ、次いで、ドイツ領内に入り、ケルンからハンブルク、さらにロストックにかけて伝道し、1561年1月31日、リュベックに近いヴェステンフェルデで、主のみもとに召された。

## 彼の信仰とメノナイト

彼の信仰は、基本的には、スイス・ブレザレンの信仰と同じである。すなわち、主のみことばへの聴従、信仰による洗礼、主の記念としての聖餐、新生した者の教会、政教分離、絶対非戦平和主義、誓いの禁止、聖別された生活などをその特質とするが、何といても、彼の信仰を特色づけるものは、そのキリスト中心性であった。

このことは彼が、彼のどの著作にも、必ず、その本のとびらのところに引用している聖句によっても知ることができる。その聖句とは次のみことばである。「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかのものを据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです」（コリント 第一 3：11）。

彼は、また、真の信仰について次のように述べている。

「真の福音的信仰は、ただ、キリストの教え、キリストの儀式、キリストの命令、キリストの禁止、そして、キリストの全き模範のみを見、また、思うのです。そして、それに一致しようと、全力をあげて努めるのです」（「真のキリスト教信仰」より）。

彼を司牧と仰いだアナバプテストたちは、メノー派（英語では、＜メノナイト＞）と人々から呼ばれたが、彼らは、迫害によって散らされ、オランダからドイツ、ロシアへ、そしてロシア革命前後にはヨーロッパ各地より、特にロシアから、カナダ、北米合衆国へと大量に移住して行った。

現在、聖書的な信仰を保持しているメノナイトの三大教派は、（オールド）メノナイト、ゼネラル・カンファレンス・メノナイト、およびメノナイト・ブレザレンであるが、日本には戦後、宣教が開始された。

### 3. 愛と和解の福音を携えて

#### 信仰の自由を求めて

迫害のためヨーロッパ各地に離散していたメノナイトの人々が、北米に移住し始めたのは、早くは1683年頃からであるが、1700年代から1800年代、さらに今世紀にかけて、しだいにその数を増していった。1873年から84年までに18,000人、第一次大戦後の1922年から30年には約25,000人、そして第二次世界大戦中には約35,000人といったふうである。

特にメノナイトの人々が多く移住してきた地域は、カナダでは、マニトバ、サスカチュワン、ブリティッシュ・コロンビアの各南部、合衆国では、ペンシルベニア東部、インディアナ北部、カンザス南部、ワシントン北部、オハイオ東北部、である。そして、南米にも、かなりの数のメノナイトが移住した。

アメリカに渡って来てからは、メノナイトの流れに対する迫害がやんだというわけではない。たとえば、彼らの非戦主義が認められたのは、ようやく1940年になってからであって、直接戦闘への参加を免除されるようになるまでには、やはり犠牲者、殉教者を出さねばならなかったのである。

#### 北米のメノナイト

北米の福音的なメノナイトのうち、主要グループは、（オールド）メノナイト、ゼネラル・カンファレンス・メノナイト、メノナイト・ブレザレンの三つである。

メノナイト教会は、ごく初期にペンシルベニア東部に移住してきたメノナイト系の人々を母体として形成されたもので、1800年頃に

は、すでにオールド・メノナイトと呼ばれ、その後、徐々に教団組織を固めて、今日にいたっている。

ゼネラル・カンファレンス・メノナイト教会は、アイオワ州のウエスト・ポイントで、1860年に結成されたが、さまざまのメノナイト系の人々に呼びかけて、些細な相違を捨て、本質的な一致を目指して形づくられたもので、スイス、南ドイツ、オランダ、プロシヤから来た人々が中心となっている。

メノナイト・ブレザレン教会は、1860年に、南ロシアで起こった信仰の覚醒によって、古いメノナイトの群れから起こったグループであるが、北米への最初の移住は、1873年で、彼らはカンザス州に居住した。その後、カナダのブリティッシュ・コロンビアにも移住が行われたが、北米メノナイト・ブレザレン教団が形成されたのは1889年であった。

以上のメノナイト諸教会は、現在では、他の福音的教会より影響を受けて、伝統的なアナバプティズムの上に、穏健なバプテスト系の聖書信仰を保持している。

また各団体とも、海外宣教には熱心で、南米、インド、中国（革命前）、日本、アフリカなど、世界各国に宣教師を派遣しており、特に南米、インド、アフリカには多数の信徒を擁している。そしてさらに良いことは、北米では、各グループが一致協力して、終戦後の国家間の和解と、敗戦国や後進国の救済にあたってきたことで、その協力機関として、メノナイト・セントラル・コミティー（1920年創設、M・C・C）を設置している。

## 日本への宣教

日本への宣教は、第二次世界大戦後M・C・Cによる愛と和解のわざをもって開始された。そして、M・C・Cの日本への最初のワーカーとして派遣されたのは、カナダのキチナー・オンタリオのメ

ノナイト・ブレザレン教会牧師であった、H・G・ティルマン師夫妻であった。同夫妻は、1949年（昭和24年）4月24日に来日、祈りと導きのうちに、大阪市此花区春日出町に土地を入手、二棟のプレハブ住宅を建て、福祉・救済活動を他のメノナイトのワーカーとともに開始し、三年間の尊い奉仕の後、帰国された。

その後、昭和25年以降、次々と純粹に福音宣教にのみ従事することを使命とした、多数の宣教師が来日され、日本各地で伝道を展開し、今日にいたっている。

現在、日本にあるメノナイトおよび、再洗礼派系の教会を北から南へと紹介すると、次のとおりである。

・・・・・・・・・・・・・・・・

日本メノナイト教会協議会（北海道／オールド・メノナイト）、  
日本キリスト兄弟団（けいていだん：東京・山口／ブレザレン・イン・クライスト）、  
日本使徒キリスト教会（東京／メノナイト）、  
日本メノナイト・ブレザレン教団（大阪・兵庫・名古屋など／メノナイト・ブレザレン）、  
日本メノナイト・キリスト教会会議（宮崎・鹿児島・大分など／ゼネラル・カンファレンス・メノナイト）。

<（かっこ内は、宣教地と母教会）>

（完）

---

（※昭和54年3月11日、18日、25日付「クリスチャン新聞」より転載しました。）

【追加注】：東京地区メノナイト教会連合（東京／メノナイト 1979年設立）

\*日本メノナイト・ブレザレン教団 発行 『よきおとずれ』 第262～264号より  
< 1979年（S.54）7月～9月 >

## 「アナバプテスト・ワールド・フェロークシツプ・サンデー」

“World Fellowship Sunday” メノナイト世界会議（MWC）

1525年1月21日に、スイスのチューリッヒで初めてのアナバプテスト（再洗礼派）の洗礼が行われました。

世界にある信仰の家族は、1月21日に近い日曜日（通例1月第4日曜日）を「世界交わりの日曜日」として守ってきました。共通のルーツを覚え、世界に広がるコイノニア（交わり）を記念するためです。

“Mennonite World Conference”（メノナイト世界会議）は、本年度（2009年）は、1月25日を「世界交わりの日曜日」として五大陸に広がる兄弟姉妹と共に礼拝を献げるよう、呼びかけています。

“Mennonite World Conference”

<https://mwc-cmm.org>

“Anabaptist World Fellowship Sunday”

<https://mwc-cmm.org/anabaptist-world-fellowship-sunday>

2006年1月22日

能勢川キリスト教会  
牧師：井草晋一（編集）

日本メノナイト・ブレザレン教団

## 有田 優 牧師 略歴



- 一九三〇年 一月八日 神戸市に生まれる
- 一九五一年 大阪市立大学Ⅱ部入学 英米文学専攻
- 同 ルツ・ウインズ宣教師と出会う
- 同 七月二十九日 ハロルド・ゲイディ宣教師より受洗  
(MB教団最初の三名の受洗者の一人)
- 一九五五年 桃山学院 中・高等部 英語教師
- 一九六一年 大阪聖書神学校 (福音聖書神学校の前身) 入学
- 一九六四年 石橋キリスト教会 牧師就任
- 一九六六年 教団議長に選任
- 一九七一年 福音聖書神学塾 (現・福音聖書神学校) 設立  
学監に就任 校長・ハリー・フリーゼン師
- 一九七二年 按手礼を受ける
- 一九八六年 脳内出血で入院・リハビリ
- 一九八九年 石橋キリスト教会 名誉牧師
- 一九九一年 七月二十日 召天 (61歳)

### \* 著書及び訳書

- <訳書> 「祝福への道」 F・B・マイヤー著 いのちのことば社  
「ペンテコステの祝福」 アンドリュー・マーレー著 同
- <著書> 「回心と召命」、「恵みのあと」、「真の教会を求めて」  
「メノナイト・ブレザレン教会 初期日本宣教小史」  
「聖書信仰の戦い —アナバプテストの今日的意義—」、他

## 発行者・発行所

Piyo Bible Ministries

ピヨ バイブル ミニストリーズ 発行

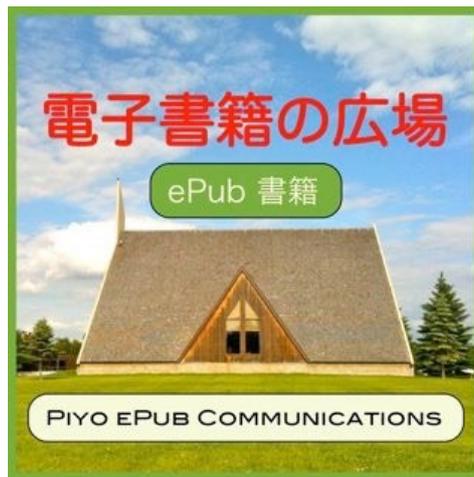
代表：井草晋一

<http://piyo-bible.com>

〒665-0877

兵庫県宝塚市中山桜台6丁目15-1-1310

Tel. 090-5367-9221



## 制作・出版

Piyo ePub Communications

ピヨ イーパブ コミュニケーションズ

1310, 15-1, 6 cho-me, Nakayama-Sakuradai, Takarazuka-city,  
Hyogo 665-0877, JAPAN

<http://piyo-epub.com>